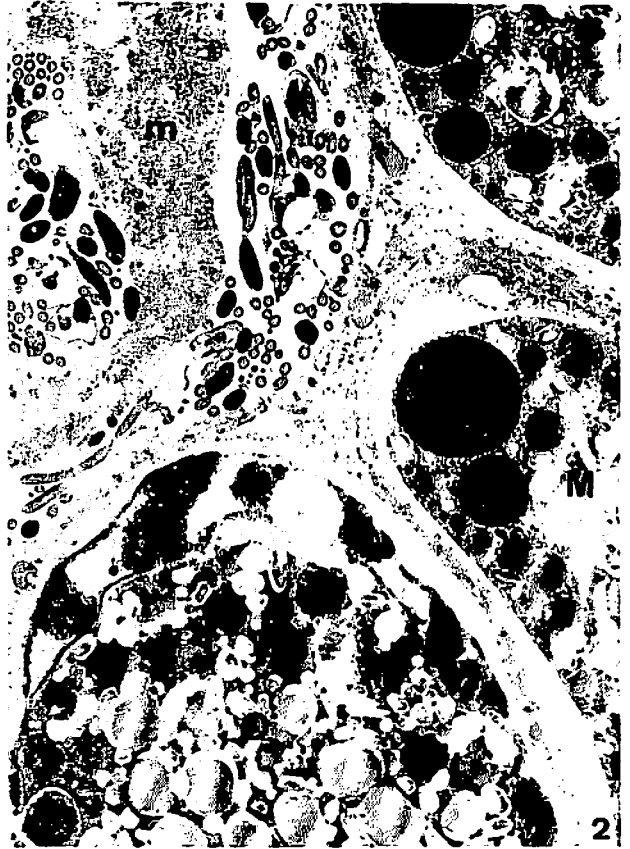
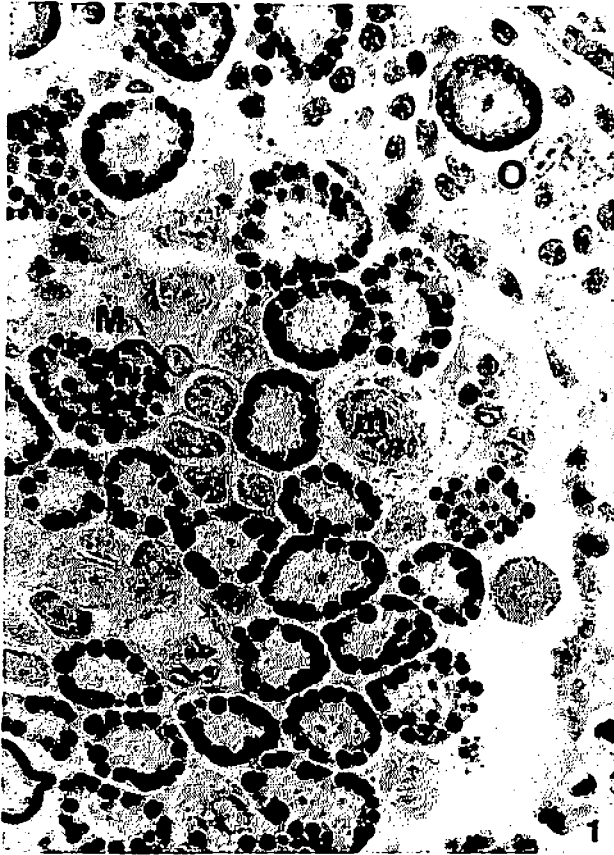


# 豚の回腸

家畜衛生試験場九州支場出題 第25回獣医病理学研修会標本No.432



動物：豚，雌，出荷豚。

臨床的事項：1984年11月27日鹿児島市食肉センターに出荷。増殖性出血性腸炎と診断され当支場に搬入。

寄生虫および細菌学的検査：寄生虫学的には *Eimeria scabra* と同定された。カンピロバクター用の選択培地を用いて *Campylobacter hyointestinalis* 6.5 (log) と *Campylobacter coli* 6.3 (log) が分離された。

肉眼所見：回盲部から小腸側に1.2mにわたり粘膜が肥厚し表面に薄いチーズ様物が付着し、漿膜は水腫性であった。

組織所見：回腸にのみコクシジウムの増殖像がみられた。コクシジウムの寄生は粘膜の上部1/3の上皮内に主としてみられたが、粘膜筋板が欠けて陰窩がリンパ濾胞と連なっている場所ではリンパ濾胞内にもみられた。コクシジウムは有性性殖期にあり、多数のマクロガメトサイト(M)、ミクロガメトサイト(m)、オーシスト(O)がみられた(写真1, HE染色, 125倍)。粘膜固有層には強い好酸球とリンパ球の浸潤がみられ、粘膜は肥厚していた。好酸球浸潤は盲腸、結腸、直腸および腸間膜リンパ節にまでみられた。若干数のオーシストは、盲腸、結腸の腔内にもみられたが、細胞内には観察されなかった。

電顕所見：マクロガメトサイト(M)は、電子密度の

高い大小様々のオーシスト壁小体と電子密度の低い小型のアミロペクチン顆粒をもっており、外層の膜は薄い単位膜で構成されていた(写真2, 5,600倍)。オーシスト壁小体は2層の膜の間に分泌され、成熟するにつれて細胞質内のオーシスト壁小体は減数しアミロペクチン顆粒が増数し、また裂隙状の空隙がみられるようになった(O)。オーシストが成熟すると、オーシスト壁小体は互いに近づきあい、電子密度の高い厚い壁となった。細胞質はエポンの浸透が悪くなり、空隙となってしまう電顕では観察不能であった。ミクロガメトサイトは中央に遺残体があり、その周囲を成熟したミクロガメイトが取り巻いていた(写真2:m)。ミクロガメイトは電子密度の高い頭部と、後方には中央に1対の微細管からなる中心管と辺縁には9対の辺縁細管からなる鞭毛を有していた。オーシスト、マクロガメトサイトを入れた細胞では、明瞭な膜構造はなかったが、寄生体に向かって細胞質の小突起を出していた。その周囲には細線維が取り巻いていた。一方、ミクロガメトサイトを入れた細胞では単位膜様の構造がみられ、ミクロガメイト側に突起を出していた。

診断：豚のコクシジウム (*Eimeria scabra*) による回腸炎。